

20220905 号	世界初のオンラインファッションウィーク	所長助理 徐潔
20220912 号	日中国交正常化 50 周年記念レセプション@青島 日本総領事館	所長 南浦秀史
20220919 号	上海での日本人コミュニティについて	副所長 土佐憲弘
20220926 号	龍美術館と徐匯区西岸エリア	副所長 小森亮人

世界初のオンラインファッションウィーク

「ファッションウィーク」といえば、パリ、ロンドン、ミラノ、ニューヨークの 4 都市で開催されるものが有名だが、近年、各国のファッション業界から視線を集めるものがある。それが『上海ファッションウィーク』だ。

2001 年にスタートした『上海ファッションウィーク』は毎年、春夏と秋冬の 2 度、ショー形式のプレゼンテーションが開催されている。その中でも意欲的な試みとして注目を集めているのが、2016 年から開催されている、若手デザイナーのためのプラットフォーム『LABELHOOD』だ。

『LABELHOOD』は、ファッションウィークの 5 日間、特設会場で若手デザイナーのショーを行って発表の場を提供している。同イベントに携わる者はほぼ全員が 10 代から 30 代の若年層で、業界進出を目指して経験を積みたいボランティアもいる。2020 年 2 月上旬、中国で最もコロナ感染が拡大し始めた時期、上海にある『LABELHOOD』のセレクトショップでは、初めて店から「生配信」を実施した。

外出自粛で先の見えない状況の中、生配信を通してステイホーム中のファンに届けたところ、これが想像以上に大反響を呼んだ。この反響を受けて「ファッションウィークもオンラインでいける」と確信を持った創立者のタシャ・リュウは運営側に提案をした。そして 2020 年 3 月、世界初の全編オンラインによるファッションウィークが開催される事になったのである。

本来、ショップで売られる予定だったアイテムをショーで見せたあと、視聴者に向けて一つずつ丁寧な解説を加えた。また、その場でデザイナーとのやり取りも発信し、つくり手の声も直接届けた。

「そのときに取ることでできる手段を最大限に活用すれば、消費者との関係を断たずに継続することができる」ということが証明され、同業者に勇気を与えることが出来たようである。また、直接ブランドやデザイナーに反響が伝わる双方向性もオンラインならではの長所であり、関係者から高い評価を受けた。

人の歩みの前に立ちはだかる壁。その壁をどのように乗り越えるか、吉か凶か、その運命を左右するのは、「意志」と「決断」の強さにあると思われる。そのような事を考えさせてくれる『上海ファッションウィーク』の果敢な挑戦だった。



日中国交正常化 50 周年記念レセプション@青島日本総領事館

山東省の青島市は、東部沿岸部の重要な港湾都市で、面積は 11282 平方キロメートル(大阪府の約 5.9 倍)、人口は 1007.2 万人(同約 1.15 倍)です。大阪とは縁が深く、青島空港初の国際便は、1994 年 9 月 7 日に大阪・関西空港との間で開通したもので、これにより青島空港は山東省初の国際空港となりました。コロナの影響でしばらく運行はストップしていましたが、8 月には直行便も復活し、関西空港から青島空港まで約 2 時間で行くことができます。また、この 6 月には青島・大港と大阪・南港との間に高速フェリーも開通し、36 時間で結ばれています。

9 月 6 日に、中国で初めての日本総領事館主催日中国交正常化 50 周年記念レセプションが青島で開催されました。山東省政府はもちろんのこと、省内の各自治体政府からも外事弁公室の担当者が、また、現地企業関係者等も参加し、およそ 300 人が参加する盛大なイベントになりました。

会場には 13 の自治体事務所が PR ブースを構え、参加者に各地の特産品や観光などの PR を行いました。また、ステージでは青島日本人学校生徒による和太鼓演奏や地元団体による柔道の実演などもあり、参加者が一体となって 50 周年のお祝いをすることができました。

中国国内ではこの後、上海総領事館や北京の大使館でも 50 周年記念のレセプションが開催される予定ですが、コロナ感染者の発生により延期や中止にならないかが心配です。



上海での日本人コミュニティについて

上海市の人口は約 2,400 万人ですが、このうち在留邦人は令和 3 年度時点で約 3.8 万人います。日系の衣料品店や雑貨店に行くと日本人らしい人に出会いますが、異国の地では日本人同士交流の場が欲しくなる時があります。

上海には、日本人同士の交流や出会いを促すスポーツ、文化、語学の同好会や出身校の OB 会、出身都道府県の集まりである県人会等があります。これらで親睦を深めたり、情報交換をしたりすることができます。

同好会や出身大学の集まりは、日本料理店や日本人向けのスーパー等で配架されている情報誌に掲載されています。代表的なものは、コンシェルジュ上海や上海ジャピオンです。このどちらにも同好会等の案内があり、上海での生活に役立つ最新情報等も掲載されています。

上海にいる大阪のことが好きな人が現在約 150 名登録している大阪人会という集まりがあります。この大阪人会も 9 月中旬に今年 2 回目の親睦会を開催しました。4、5 月の都市封鎖とその後の防疫対策で長らく開催できていませんでしたが、久々にお会いする方や上海に来て間もない方達と交流することができました。

他の同好会や出身校の OB 会も徐々に活動再開し、交流会が此処彼処で行われています。なお、大阪人会の幹事は大阪府上海事務所の職員も務めていますので、これから上海に来られる方、既にいらっしゃる方もどうぞ遠慮なくご連絡ください。



龍美術館と徐匯区西岸エリア

9月より副所長として着任しました小森と申します。これから少しでも現地の雰囲気をごさまでお伝えしたいと思います。

さて、赴任後初めて迎える週末、いきなり定番の観光地というのやや味気ないので、市の中心を流れる黄浦江を少し遡った徐匯区西岸エリアにある龍美術館へ足を運びました。

龍美術館は美術収集家の劉益兼・王薇夫妻が設立した私設美術館です。チケット代は220元(約4,400円)と日本と比べやや高めながら、館内では複数の展覧会を同時に開催しており、それら全てを1チケットで観覧できるので見て回る時間さえあればむしろ割安とも言えます。展示内容は中国内外で活躍した画家の足跡を特集した企画展や、伝統的な中国畫の著名作家を対比した展示、現代美術家の個展など様々で、中国の美術事情に疎かった自分にはとても楽しめるものでした。建物内はコンクリート打ち放しの大空間や螺旋階段が要所に配置された作りになっており、建築が好きな方にも一見の価値があるかもしれません。

美術館は元々セメント工場があった場所に建てられており、工場設備の一部を屋外に保存しています。長年使用された金属とコンクリートの存在感と、同じくコンクリートを基調とする美術館外観が組み合わせ、新旧の対比と調和が図られた面白い空間になっています。工場設備跡の下部や周辺は立ち入りが可能で、訪れた人は座ってくつろいだり写真を撮りあったりと、思い思いの過ごし方を楽しんでいます。美術館のそばには黄浦江沿いに遊歩道が整備されており、港湾設備の名残と思われるクレーンをほぼそのままの形で歩道内に残すというダイナミックな景観づくりがなされています。休日ということもあり、周辺は多くの人で賑わっていました。

そんな徐匯区西岸エリアは大規模な再開発が進められている地域であり、美術館周辺には工事現場の仮囲いが広がっています。数年後のこの場所がどのような景色となるか、興味深いところです。

